

《解説》

田浪 亜央江

作者アズミー・ビシャーラは一九五六年にイスラエル領内のナザレに生まれたパレスチナ人である。ヘブライ大学での学生時代は共産党員として学生運動に参加、二〇歳の時にアラブ学生連合を設立し、初代議長に就任している。一九八六年、ドイツのフンボルト大学で哲学の博士号を取得し、九四年から九六年までビールゼイト大学で哲学を教えた。また九四年にアラブ政党「国民民主会議(通称・タジャンモウ)」を立ち上げ九六年から二〇〇七年四月までイスラエルの国会議員として活躍した。一種のカリスマ性をもったビシャーラ率いるタジャンモウの登場は、同時期にイスラーム政党が躍進し始めたことと合わせ、それまでのイスラエル共産党への結集を中心としたアラブ人たちの政治的配置図を大きく変える一種の「事件」だった。

の若者たちが、ビシャーラ独特の語彙や言い回しである「ビシャーラの辞書」から得意げに引用しつつ議論する、といった現象も見られた。そうした状況を背景に刊行されたのが、ここに一部を訳出した『アル＝ハージズ「壁」』(原題『アル＝ハージズ 断片的小説』al-Hāziz: shaZāya riwāyah、二〇〇四年)である。ハージズとは一般に「障壁」を意味するアラビア語だが、ここではパレスチナ被占領地であるヨルダン川西岸地区にイスラエル当局が建設した分離壁を指す(実際に人びとが直接関わるのは壁全体というより、そこを何時間も待つて通過しなければならぬ検問所であるため、ハージズは「検問所」の意味で使われることが多い)。原題にあるとおり、この作品はさまざま「断片」を集めたもので、各章の多くは壁や検問所に関する話題やそこでの光景の描写に始まりながら、さまざま方向に脱線してゆく。書き手の娘ワジユドをめぐる一年のなかでの挿話であるという枠組みは存在するものの、全五十九章を流れるストーリーは存在せず、視点も各章ごとに変わってゆく。しかし一貫しているのは細部へのこだわりであり、パレスチナ社会で実際によく話題にされる議論やいかにも交わされていそうな

会話、壁の登場によって生まれた新たな表現や現象が詳細に描き込まれている。したがって被占領地の「今」に関心をもつ者にとっては、それ自体が貴重な資料であるとも言える。言葉遊びや筆者による造語も豊富に見られるが、これも被占領地の言語状況や人びとの発話のあり方が、そのまま写し取られたものと考えた方がよい。

なお、ビシャーラは二〇〇六年のイスラエルによる対レバノン戦争中にヒズブツラに情報提供をしていたとの嫌疑でイスラエル当局により取り調べを受けていたが、二〇〇七年四月、国外(カイロ)のイスラエル大使館で突然国会議員の辞職状を提出した。これにより国会議員がもつ不逮捕特権を失い、以後イスラエルに帰国することなくアラブ各国のメディア上での論評活動を続けている。タジャンモウとは一切の關係がなくなったというのが公式の説明だが、同党にとってはいまだこの「象徴的リーダー」を仰ぎ見ることは、党内の結束力を保つために重要な意味を持っているようである。